

開発の現場から

私にとっての「途上国現場」経験 ータイ国チェンマイでの JICA シニア海外ボランティアー

倉又 孝

(株) 国際開発アソシエイツ代表

1. 単独派遣からグループ派遣へ

国際機関で若くから活躍されてきた SRID 会員のみなさんと比べると、私の途上国での現場経験は十数周遅れと言っても過言ではありません。私の場合は、65 歳になったのを契機に都市計画支援の JICA シニア海外ボランティア (SV) を志願して 2002 年の 10 月にタイ国内務省チェンマイ県都市計画事務所 (国の出先機関) に赴任した時が始まりです。

この時は事情があって派遣期間が 1 年に限られた上に、にわか仕込みではどうにもならないタイ語という厚い壁 (カタコト会話が精々、読み書きは絶望的) に阻まれて、這う這うの態で逃げ帰ったというのが実感です。とはいえ、本来の支援業務の面では、法的期限が切迫していた「チェンマイ圏都市総合計画」の改訂(案)に対して、機会あるたびにコメントや改訂作業への提言を行いました。しかし、残念ながら、そのたびに隔靴搔痒の感を味わらざるを得ませんでした。

このような経験を通して、頭だけでなく身をもってチェンマイ都市圏の抱える問題を深く理解することが重要だと考えるに至り、さっそく事務所長 (カウンターパート: CP) の承認をもらい、次週より毎水曜日を自宅研修の日として自転車をレンタルして (時には“ソンテウ”という乗合バスで) 隈なく見て回ることになりました。その結果、いくつもの事実発見がありました。ここでは 3 つの点だけとりあげておきます。

- 幹線道路の主要交差点では朝夕激しい交通渋滞が生じ、騒音や大気汚染がひどくなっているが、その大きな原因は郊外部での民間宅地開発事業者による「ムバーン開発」(注 1) に伴うマイカー交通の急増によるとみられ、都市計画上の対応が不可欠である。
- チェンマイは 700 年の歴史をもつ古都であり、ランナー王朝時代の旧王城を中心に多くの文化遺産があるが、王城を囲むお堀と街路樹や多くの寺院の名木・巨樹、さらには有名な街道の並木道は、自動車の激増により危機に瀕している。国際文化都市のチェンマイにとって、古都保存と景観保全(街路樹を含む)は必須の課題である。
- 北部タイにはチェンマイを中心に欧米人ばかりでなく多くの日本人の退職者が“ロング・ステイ”している。彼らはなぜチェンマイを選好し、その生活実態はどんなものか。タイ政府が推進するロング・ステイ政策に合致しているのだろうか。(注 2)

さて、1年の任期も残り幾月もない頃、JICA 本部からの願ってもない問い合わせがありました。新たに SV グループ派遣の制度を設けたので良い案件があったら申請してほしいというものです。正直に言って小躍りしました。都市計画支援ではひとりの SV では実効を上げるのは困難なのは私の例で明らかです。さっそく CP の所長と話し合ったところ、たちまち6分野で6名の SV グループ派遣を要請したいということであり、私としても何としても実現して今度こそお役に立ちたいとひそかに誓った次第です。

帰国後 SV グループ派遣の具体化について検討を重ね、JICA による要請背景調査を経て、ようやく4名（都市計画、土地区画整理、古都・景観保存、通訳・調整）の都市計画支援グループ派遣(2年間)が実現したのは、2006年10月でした。かくして、私がチェンマイとの関わりは、派遣期間に限れば通算3年でしたが、2回目への準備を含めると足掛け7年に及んだわけです。なお、JICA による終了時評価（SV グループ派遣では初めてのケースと聞く）では一定の評価をいただくことができましたのは幸いでした。

2. チェンマイ大学との共同調査とメージョー大学との協力

2年間にわたる都市計画支援グループは、「急速な都市化と強い都市開発圧力が続くチェンマイ都市圏において、開発と保全のバランスを重視し、緑豊かな住みよい国際文化観光都市を構築する」を大目標としてかかげ、それぞれの分野で3~4の具体的な活動項目を設定し連携しながら活動を開始しました。ここではその詳細にふれないことにして、地元の2つの国立大学との協力関係についてだけとりあげます。

その一つは、チェンマイ大学建築学部との共同調査です。郊外部で進む民間宅地開発事業者による「ムバーン開発」の実態調査とその結果に基づくチェンマイ都市計画への提言です。先行研究調査の文献サーベイ、ムバーン開発の統計整理・分析、代表的なムバーン開発ケーススタディ、土地分割分譲法（ムバーン開発の根拠法）と土地区画整理法との比較検討等がその主な内容です。この共同調査ができたのは、ひとえにチェンマイ大学建築学部で京都大学で都市計画の博士号をもつ准教授のナウト氏がおられたからであります。

チェンマイ都市圏では、民間宅地分譲事業者によるムバーン開発がはじめて登場したのは1970年代後半であります。1990年代以降になると、基幹道路として放射線および第一・第二環状線が整備されるに伴い、郊外部へ郊外部へとムバーン開発は飛び地的に展開し、市街地の外延的な拡大が急速に進みました。大規模なムバーン開発自体をみますと、経済発展とともに生まれてきた新中間階層が求めるライフ・スタイルと高質な住宅需要に答えているという側面があります。しかし他面、周辺農用地との土地利用の問題、公共交通不在のためマイカーへの過度な依存による交通問題など多く

の都市計画上の問題がすでに顕在化していました。

一方、既成市街地に近い郊外部での小規模零細なムバーン開発は、道路沿いに「虫食いの的に」進むケースが多く、雨水・汚水の排水施設が不十分なため、結果としてムバーン開発で取り残されたかたちの囲い地が生まれ、あるところでは汚水やごみの不法投棄地となり、今後の都市開発にとって深刻な障害になることは明らかでした。このような背景を踏まえ、調査の目的は、第1にムバーン開発の実態を多様な側面から調査し、良好な市街地形成の観点から都市計画および土地利用計画の課題を明確にして改善点を提案すること、第2に土地区画整理法が施行された現段階でムバーン開発事業との関連性（競合・協調）を検討し、チェンマイ都市圏での可能性と今後のあり方について提言すること、の2点に絞りました。チェンマイ都市圏での大規模なムバーン開発は、わが国の基準でみると、土地区画整理事業（LR）の適地条件を備えているとあってよいところがかなりあり、長年にわたるわが国の協力が続いているにもかかわらず、なぜタイではLR事業が進まないのか、その理由を見出したかったからです。この調査を通じてかなり明らかとなりましたが、私の問いは今なお続いています。（注3）

もう一つは、メージョー大学園芸学部との協力です。1回目のSV派遣時に園芸学部
に招かれ、チェンマイの景観重要樹木として街路樹や寺院内の名木や大樹の重要性を
強調し、診断・治療・管理を行う樹木医の養成コースを作って、都市緑化行政を担う
人材を自治体へ送り込むべきだと力説したところ、強い関心と賛同を得ました。これ
を受ける形で2回目のグループ派遣時に、JICA短期SV（1ヵ月）として東京農業大
学の濱野教授に来ていただき、①大学での教官・学生への講義・ワークショップ、②
危機に瀕している街路樹を対象にして実技指導をお願いしました。実技指導の現場で
は、地域住民が熱心に見守るなか、道路関係者もやってきてつぎつぎと質問していた
のは印象的でした。

タウン誌（2010年5月）によりますと、これらの成果はメージョー大学「景観テクノ
ロジー学科」（新設）のバンジョン先生を中心にしっかりと受け継がれ、チェンマイ・
サンカンペーン街路樹再生プロジェクト（2年間）として実施中であり、同大学の学
生たちよって結成された2組の樹木医ボランティア・グループ（それぞれ30～40人）
が先生の指導のもとで診断カルテの作成やそれに基づく治療・処置に取り組んでい
ることです。

3. 「(社) 奈良まちづくりセンター」(NMC) と「チェンマイ都市開発研究財団」 (UDIF) との架橋とその後の交流事業

以上の2つの地元大学との協力関係と並んで、私が触媒役を果たせたのではないかと

と思うのは、「(社) 奈良まちづくりセンター」と “Urban Development Institute Foundation(UDIF)” との交流であります。例によって自転車で市内を回っていたところ仏教協会の建物の塀に UDIF (英語看板) があるのに気付きました。さっそく飛び込んで話を伺うと、UDIF は古都チェンマイの環境 (とくに大気汚染防止) ・街並みおよび歴史的建造物保存に取り組む市民活動組織であり、わが国と交流を強く望んでいることがわかりました。

そこで試みに古都奈良の街並み保存に多くの活動実績をもつ (社) 奈良まちづくりセンター (NMC) にメールで呼び掛けてみたところ、これまでの活動の歴史と現況に関する資料一式がどっと送られてきたばかりでなく、カンボジアに滞在中の NMC 理事の桂先生が急遽チェンマイに飛んでこられました。たちまち今後の交流についての覚書が交わされ、数ヵ月後には最初の交流事業として、NMC から調査団が来てチェンマイの歴史地区の調査とまちづくりセンターの開設について具体的な提案がありました。

その後、私たちの都市計画支援のグループ派遣では、古都・景観保存担当メンバーとして上嶋 SV が NMC から参加してもらうことになり、UDIF ばかりでなく、チェンマイ建築家協会や歴史地区の市民組織とも交流を深めることができました。そして 2007 年 8 月には、私たち SV が企画・主催して「日タイ修好 120 周年記念古都奈良とチェンマイの交流フォーラム」を開催しました。奈良(10 名)から橿原市の景観保存、神戸大震災の経験による地域防災、チェンマイ建築家協会および NGO からチェンマイの都市景観の課題、上嶋 SV から景観保存のためのデータベースについてそれぞれプレゼンテーションがあり、予定時間をはるかに越えて熱心な討論が続き、景観保存・地域防災・都市計画は一体であり、その達成のためには行政と住民の協力と参加が不可欠であるという認識を共有することができました。

チェンマイとの交流と協力はその後もつづき、今春には奈良ロータリークラブとチェンマイ・ロータリークラブの交流も始まり、街路樹保全のための機材提供が検討されています。今回はここまでにしておきますが、シニア海外ボランティア (SV) は長年の国内経験とそこで培われた人材ネットワークによって、効果的な国際協力を行うことができることを理解していただければ幸いです。

(注 1) 典型的な「ムバーン開発」は、民間宅地開発事業者 (デベロッパー) が郊外の幹線道路沿いの農用地・雑種地等を一括買収し、宅地造成して、造成地全体の境界をコンクリート塀で囲い、その中に相当数の戸建て住宅を建設、販売いくものである。幹線道路からの住宅地へ向かうところには城門のような門があり、守衛が 24 時間体制で居住者と訪問者の出入りを管理している。一般的には、門は一つで、通り抜けはできない。欧米でいう “ゲイテッド・コミュニティ” と同じ形態たといえる。「ムバーン開発」のもたらす都市計画上の課題、土地区画整理事業

との対比などは、(注3)の報告書をご参照ください。

(注2) 倉又孝『チェンマイにおける日本人ロングステイ者の実態調査』2003年9月

(注3) 倉又孝・大島忠剛・Nawit Ongsawangchai(Ph.D), 2008年3月, 『チェンマイ都市圏におけるムバーン開発の実態と都市計画及び土地利用計画の課題』